

学生の語彙使用例から見た「日本語力」とその教育方法

上原 作 和*

Japanese Language Ability and Pedagogy Judging from Student Vocabulary Use Examples

Sakukazu Uehara

キーワード：学生の語彙使用例、日本語力、教育方法

Student Vocabulary Use Examples, Japanese Language Ability and Pedagogy, Educational Method

I はじめに

学生の書いた文章を添削していて顕著な傾向として気付いたことがある。それは、本来なら、「思う」、もしくは「考える」と書記すべきところ、これらを「感じる」と書き記す学生がいることである。たとえば、このような使用法である。

○文章をまとめるのがとても難しく感じた。これからも練習していきたいと思う。

環境生態系1年 男子

あるいは、「難しかった」「大変だった」とのみ書き記すレポートは、昨今の大学教員なら誰しもよく見受けるものであろう。同じ講義レポートの一節である。

○人それぞれ文章のとらえかたが違っておもしろかった。

環境生態系一年 男子

このように、本来なら、「～と思われる」、「～と私は考える」と書くべきところを「～感じる」「おもしろかった」等と書記する例は、出講先の大学の小論文、レポートにも散見されることであり、特に前者の「感じた」については、明星大学の学生に限定される文章能力の問題ではない。わたくしが、今の学生について、このような傾向があることを添削を繰り返す中で気付き始めたのは、ここ二、三年のことである。つまり、「ゆとり教育世代」に特徴的な文章表現であると言えようか。最近でもこのようなコメントに接した。

○まだまだ実力が足りないと感じた 石川佳澄 卓球全日本選手権準優勝コメント

『朝日新聞』2012年1月23年朝刊スポーツ欄

この表現も「と思います」が穏当な使用法と言うべきである。19歳の石川選手の言う「実力」とは全日本選手権二連覇の夢を断たれた自身の成績、ならびに技術、体力、精神力等の総合的な評価を自身が下したものであるから、漠然とそのような「抽象性=感じ」を述べたものと解し得る。むしろ本人が、自身の実力を「相対化」出来ていれば、「～考える」と述べるべきであらう。ただし、この記事の場合、記者が若者言葉としてコメントを加工した可能性もあることに注意が必要である。

さて、このように完全に定着した感のある「感じる」は、実際には「サ行変格活用動詞「かんずる（感覚動詞）」の上一段化したもの」*¹であり、これは誤用例が慣用化して「感じる」が定着したものである。これはすでに慣用

* 人文学部常勤教授 明星教育センター

化が顕著であり、いずれ国語辞書そのものが、この慣用化を認めざるを得ない状況であろう。「言葉」は「生き物」であって、生成変化することが常であり、でなければ、平安時代人と現代人の会話が成立するはずであるが、それが困難であることは、高校の古典の授業が外国語と等し並みに認識されていることを見れば明らかだろう。

さて、本稿の課題とする「感ずる」の問題であるが、本来なら、以下のような意味で用いられるのが一般的であるとされている。

①心にひびく。心が強く動かされる。感動する。

- * 宇津保〔970～999頃〕俊蔭「御門おほきに驚かせ給て、かんぜしめ、聞こし召すことかぎりなし」
- * 源氏〔1001～14頃〕横笛「かの衛門のかみは、童（わらは）よりいとことなる音を吹き出でしにかんじて」
- * 大鏡〔12C前〕二・時平「この詩、いとかしこく人々感じ申されき」
- * 徒然草〔1331頃〕四一「人、木石にあらねば、時にとりて、物に感ずることなきにあらず」
- * 浮世草子・武家義理物語〔1688〕一・二「武士の息女の心底と深く感（カン）じて」
- * 小学読本〔1874〕〈榊原・那珂・稲垣〕五「盗賊共且はおどろき且は感じて其金貨を受け取らざるのみならずさきの物までことごとく返して」
- * 魏徴一述懐「人生感意気、功名誰復論」
前世の行為の報いが現われる。
- * 平家〔13C前〕三・有王「さればかの信施無慙の罪によって、今生に感ぜられけりとぞ見えたりける」

②外物の刺激を受けて反応する。

- * 露団々〔1889〕〈幸田露伴〕七「夕日がきらきらすると、其熱に感（カン）じて、葉が青く顕れて」
- * 社会百面相〔1902〕〈内田魯庵〕破調・上「木鳥は電気に感じたやうに二三尺飛退って」
- * 易経一咸卦「天地感、而万物化生」

③病気に感染する。

- * 和英語林集成（初版）〔1867〕「カゼニ kandzru（カンズル）」
- * 花柳春話〔1878～79〕〈織田純一郎訳〕四一「愛馬突然虎烈刺（コレラ）病に感じて殆んど将さに死せんとするが故なり」
- * 妄想〔1911〕〈森鷗外〕「自分もいつどんな病に感（カン）じて、こんな風に死ぬるかもしれないと」
- * 宋史一朱光庭伝「遂感疾、猶自力視事」
〔他サ変〕かん・ず〔他サ変〕

④感心する。ほめたたえる。

- * 今昔〔1120頃か〕二・一三「夫、妻の言を聞て、其の心を感じて喜ぶ事、无限くして」
- * 平家〔13C前〕一一・弓流「弱（わうじゃく）たる弓をかたきのとりにて（略）嘲哂せんずるが口惜ければ、命にかへてとるぞかしとの給へば、みな人是を感じける」
- * 徒然草〔1331頃〕二三八「その詞のあやまらざる事を、人みな感ず」
- * 天草本伊曾保〔1593〕イソボの生涯の事「テイワウ ソノ ヤサシイ ココロザシラ canji（カンジ）サセラレテ」
ある感情、感覚をひき起こしたり、ある考えを浮かべたりする。心に思う。
- * 当世書生気質〔1885～86〕〈坪内逍遙〕五「一昨夜以来大に感（カン）ずる所あって、僕は志を決したから」

- * 忘れえぬ人々 [1898] 〈国木田独歩〉「僕は其時ほど心の平穩を感じることはない、其時ほど自由を感じることはない」
- * 草枕 [1906] 〈夏目漱石〉五「罵詈其れ自身は別に痛痒を感じぬが」
- * 青年 [1910～11] 〈森鷗外〉八「音調や表情に温みが籠ってゐるので、純一は不快を感じ（カン）ぜない」

【語誌】元来、外物に触れて心が動く意で、人の心のさまざまな動きを含み、さらに人心のみならず万物が何物かに触れて反応する意を持つ。漢文訓読文では古くからこうした意味を持っていたが、平安時代の和文以来、一般には「心が強く動かされる」意で用いられてきた。しかし近代になると、生理学的な刺激に対する反応や感覚的に微細な反応の意味合いが強くなり、語形も上一段化するようになった。

上記の語彙使用例からすると、前記学生の使用例は、「語誌」にあるように、「心が強く動かされ」た、の意で用いられたようだが、これだと、現在認知されている語彙使用例には不適合であること、すなわち、現在慣用的に使用されるものは不適切な用法であることもまた明らかとなるわけである。

ところが、「感ずる」「思う」「考える」など、一般的にも頻繁に使用される語彙使用例であっても、すべての日本人が正確（＝精確）にこれらを使い分けて来たかと言えば、もちろんそうではない。例えば、160万部のロングセラーとなった大野晋の『日本語練習帳』*2の最初の問題は、「思う」と「考える」の特性の問題であったことは、この問題が、実は「ゆとり世代」以前の当時ですら曖昧に認識されていたことがよく分かるはずである。

同書によれば、一般の理解として、「思う」が感情的で、「考える」が理性的働きと答える傾向にあることを前提としながら、著者はこの通念的理解を一蹴し、「思いこむ」と「考えこむ」、「思い出す」と「考え出す」の違いから、「思う」と「考える」の本質を、単数の対象に対する思考を「思う」、複数の対象に関する思考を「考える」であると明確に二分した。わたくしに言い換えれば、「思う」は対象が抽象的で、「考える」は対象が具象的、あるいは、心的イメージからして「考える」はスパイラルで、「思う」はストレートな思考を言うものとも規定できようかと思われる。

このことは、例えば『源氏物語』には「思ふ」は多く見られるものの、「考ふ」の用例は見られないながら、ただし「勘ふ」の5例の使用法からも応用可能なのである。例を挙げれば、「宿曜のかしこき道の人に勘へさせたまふにも同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべく思しおきてたり」（桐壺卷）のように、宿曜の勘申によって、光の君を賜姓源氏としたような卜占の使用例に限定される。この場合も複数想定される事案から単数の事案を導くと言う語義に於いて、『日本語練習帳』の著者の規定を裏書きするものであると言えよう。また、この事例から、平安時代人の語彙使用例は、「情理」のうち、「情」が「理」に優先されていたとは言えるであろう。むしろ、「理」詰めの思考というものの存在が「平安語彙」から認められないという例証となるものなのである。「情」の平安時代語の使用例は、『源氏物語』と並ぶ日本文学を代表する作品『枕草子』にもそれが言える。例えば、「をかし」「あはりなり」「おもしろし」「らうたし」と言った「感情語」の多彩さから、この時代の「情」の思考を窺い知ることができると言えよう。

『日本語練習帳』の著者の見解は往古の『古事記』『万葉集』『源氏物語』の語彙使用例、ならびに、十余年前の一般の現代語使用例までの膨大な日本語語彙使用データから導き出されたものであった。しかも、特定の語彙使用例を検討することによって、日本人の言語認知システム、あるいはその思考回路の特性の一端を把握できることを示したものであることに留意されたい。この著者は外国語の使用例と比較しつつ、言わば、対照言語的なアプローチによる日本文明史を展望していたのである。

Ⅱ 「ゆとり教育」と日本語力

そもそも、冒頭に示したような「語彙力」の低下、語彙カテゴリーの単純化は、言うまでもなく、「ゆとり教育」とともに、現代の教育環境の激変と無関係ではないように思われる。

わたくしは、日本語（国語）関係に関しては、講義であっても演習であっても、日本語文献の音読をひとつの判断基準とする。ほぼ、国語力の低下が顕著であることは担当教員の一致した見方であろう。大学の實力を測るひとつの指標は「大学受験者数」であるが、このトップレベルの大学ですら教室での国語力の低下が顕著で、ほぼ「日本語文章表現」課目を必修化しつつあると言うことは、選抜の規準となるハードルそのものが低下していることを前提としたカリキュラム改革と言うことになる。ただし、後述するように、「ゆとり教育」導入後でも、全国学力実態調査の成績は落ちておらず、むしろ上昇傾向にあるというデータもある。では何が低下していると教員間に「感じ」させているのだろうか。本を読まない、高い教科書を買おうとしないのは現代の大学生の経済状態を反映している側面もあり、一概に否定的な見解を述べるのは早計ではあるものの、やはり、学生の文化的背景が活字文化圏外にあることは認めなくてはなるまい。

さて、ゆとり教育の経緯をわたくしなりに要約すると、1980年代から深刻化した校内暴力、いじめ、登校拒否、落ちこぼれなど、学校教育や青少年にかかわる数々の社会問題を背景に、1996年（平成8年）7月19日の第15期中央教育審議会の第1次答申が発表された。この答申は子どもたちの生活の現状として、ゆとりの無さ、社会性の不足と倫理観の問題、自立の遅れ、健康・体力の問題と同時に、国際性や社会参加・社会貢献の意識が高い積極面を指摘する。その上で答申はこれからの社会に求められる教育の在り方の基本的な方向として、全人的な「生きる力」の育成が必要であると結論付けたものであった。

ところが、生徒たちの学力低下が深刻化すると政府の方針転換がはかられ、2005年（平成17年）、中山文科相（当時）が中央教育審議会に学習指導要領の見直しを指示した。

2007年（平成19年）10月30日の中央教育審議会答申ではゆとり教育による学力低下を認め、反省し、授業日数及び算数・数学、理科、外国語の授業時数増加を提言したのである。

くわえて、教育再生会議（内閣府設置会議）が出した報告書（第1次：2007年（平成19年）1月24日 第2次：2007年（平成19年）6月1日）において、「授業時間の10%増（必要に応じて土曜日授業の復活）」などが盛り込まれたのであった。さらに、2008年（平成20年）2月15日、文部科学省は諮問機関「中央教育審議会」が前月に出した答申に沿い、2011～2012年度から授業時間を全体で3～6%、理数系に限れば2009（平成21）年度から前倒し実施で15%ほど増加させた指導要領改定案を発表した。なお、高校の指導要領改定案は2013年度の第1学年から、理数系に限れば2012年度の第1学年から学年進行で実施される予定である*3。

ゆとり教育の第一の眼目は、「学校週5日制」であろう。1992年9月に公立学校において、第二土曜日が休日となったことから始まり、1995年度から第四土曜日、そして2002年度からは全ての土曜日が休み（完全学校週5日制）となっている。このことは、学校教育法施行規則（第六十一条）にも決められており、2011年現在も、公立学校においては、基本的に全ての土曜日が休みである。したがって、私立では、「塾に通わなくて済む受験対策」および「学習時間の確保」が学生募集に共通する謳い文句となったのであった。また、受験機会を減らし、時間を掛けて人材を育成する目的で「中高一貫校」も乱立した。わたくしも10年ほど前、埼玉の私立高校で、受験対策カリキュラムの策定に協力したことがあった。まず中学校の設立準備と併行して、周辺の大学習塾と提携し、優秀な中学生を特待生制度を利用して優先的に集め、徹底した少人数クラスとし、予備校講師を招いて、放課後、土曜日半日を使って受験対策を行うもの

であった。進学校では当たり前となっている高校三年間のカリキュラムを二年生までに終え、高校三年次はコース別の受験対策をもっぱら予備校講師に委ねて行うと言う内容である。

ところが、残念ながら私立高校には必須であるはずの、「教育理念」や「教育目標」を会議の場で聞かされた記憶は二年間の準備期間中ついぞなかったことであった。生き残りのためとはいえ、内心忸怩たるものがあったことは否めない。

多くの私立高校、もしくは公立高校の一部でも、大なり小なりこのようなシステムで受験指導が行われては来たものの、相対的には学力低下は顕著になっているというのが現状である。ただし、前述したように各種学力実態調査に関しては、基礎学力が向上したとする結果が報告され、その評価については賛否両論があることは言うまでもないのであった*4。

さて、文部科学省は、当時の教育改革の目玉であった、「完全学校週5日制」について、「生きる力をはぐくむ」ために必要であるとしていた。そこで導入されたのが、「総合的な学習の時間」である。これは1998年の学習指導要領の改正のときに新しくできた科目で、2002年度以降に開始された。その後、2008年の学習指導要領が改正され、新しい学習指導要領で、この総合的な学習の時間の授業時間は結局削減されることとなったものの、現在もこれは継続して実施されている。

しかしながら、この間、時間数を大幅に削減された結果、教科書が薄くなり、学力低下を誘引したことは否めない。冒頭のような語彙力の貧弱な学生の文章も、ゆとり教育に加え、大学全入時代で超易化した入学試験によるものと言うことが出来よう。

Ⅲ 大学生のための日本語力養成の必要性

明星大学で平成22年度から全学的に導入された「自立と体験1」は、この「総合的な時間」の明星大学初年次版とでも言い得る内容である。大学全入時代の今日、従来のカリキュラムの枠組み、例えば、教養課程と専門課程、本学で言えば全学共通のカリキュラムと専門科目のみでは掬い切れない学生の受け入れ態勢の構築が必要となっていたのである。そのような時代的な要請により導入された「自立と体験1」の教育目標は、「明星大学に学ぶ学生としての自分を理解し、各自の理想や目的を明確にしていくこと」と定められた。これは明星大学の教育目標「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」のための第一歩として設定されたものであった。つまり、自分の夢の実現に向けて努力し、他の人のために役に立つことのできる人を育てることが授業設定のテーマと言うことになる。

各大学でも、ここ十年来、初年次教育科目が相次いで導入されつつあり*5、明星大学のように、「初年次教育」先進校を研究し、独自のカリキュラムを数年を掛けて開発する大学もあれば、読み、書き、話すこと、あるいは調べること、と言った専攻に合わせてその基本的なスキルの習得の時間に当て、これを「教養基礎演習」「特別演習」と称して一年次に当てる大学とに二大別されるようである。

例えば、註記引用した「朝日新聞」2008年6月3日でモデルケースとして取り上げられた関西国際大学の場合、以下のような教育内容で実施されていたことが知られる。

■初年次教育のひとつ「学習技術」に見る授業例

- ◇ノート・テイキング
- ◇リーディングの基本スキル
- ◇大学図書館における情報収集
- ◇インターネットによる情報収集

◇情報の整理

◇アカデミック・ライティングの基本スキル

◇パソコンによるライティング・スキル

◇わかりやすいプレゼンテーションのために

(注) 関西国際大が開発したテキスト「知へのステップ」(くろしお出版)から抜粋

これらの試みは、すでに多くの報告書等が作成され、これらを分析した書籍も多数ある*6。

全学規模で行う明星大学の場合、パソコンスキルは「情報リテラシー」等の課目に特化されているが、これを除けば「教育コンテンツ」に多くの共通項を見出すことが出来よう。

しかしながら、明星大学の場合、「自立と体験1」のカリキュラムでは「読み、書き、話す」と言ったスキルのうち、「話す」ことに力点が置かれ、「読み書く」ことは二次的に全15回中三回の「レポート」と、適宜、参考として加えられる「コラム」を読むことの中に「含まれている」に過ぎない。やはり、「読み書くこと」は、別にこのことに特化(もしくは重点化)した課目を設定する必要があるように思われる。実はこのことこそ喫緊の課題であると言うことになろうが、カリキュラム編成の問題も絡んで、実現の道は遠いようである。

冒頭に述べたように、現在の大学生の語彙力は、平安時代人のように、「情理」のうち「情」に関する語彙のブランチが単純化されて使用される傾向にある。この傾向を克服するために、「理」の語彙体系を復原する手立てとしては、「自立と体験1」で反復トレーニングされる論理的な思考法の自発的発見の教導とともに、絶対的に不足している読書量を倍加させる必要がある。男子学生に比べ、読書量の多いフェリス女学院大学のように、図書館と学部のコラボレーションによって「読書運動プロジェクト」を展開している大学もある(文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された本学の「読書運動プロジェクト」)*7。これは書籍化されているので参照可能である。

当該書のウェブサイトによると*8、

読書が危機だとよく言われる。日本の高校生も大学生も半数以上本を読まないし、読む本も圧倒的に少なくなっている。大学図書館の需要は下がる一方で、しかも大学図書館では人べらし、本べらしが深刻で、もはや知の蓄積と運用の態勢を維持できないところまで追い詰められている。いまデキルことは何なのか。図書館が頭をしぼって考えた読書推進運動は学生・教員を巻き込み、台風の目玉のように全学を席捲したフェリス図書館の七年間。とある。このような大学全体の問題意識の掘り起こしを明星大学でもかたちにするのと、カリキュラムの見直しが必要であるように思われてならないのである。

このことは、明星教育センターのみならず、大学全体で考えて行く必要があることは申すまでもないことである。

注

*1 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』小学館、2000～2002年

*2 大野晋『日本語練習帳』岩波書店、1999年

*3 新学習指導要領(現行学習指導要領)-文部科学省/新学習指導要領・生きる力-文部科学省

*4 “PISA(OECD生徒の学習到達度調査)2003年調査”. 文部科学省(2004年12月). 2010年9月22日閲覧。

“OECD生徒の学習到達度調査(PISA)2006年調査国際結果の要約”. 文部科学省(2007年12月). 2010年9月22日閲覧。

*5 教育・全入時代 初年次教育で、やる気「朝日新聞」2008年6月3日付朝刊。

*6 河合塾編『初年次教育でなぜ学生が成長するのか全国大学調査から見えてきたこと』東信堂、2010年6月等。

- *7 フェリス女学院大学附属図書館『いま、図書館に求められるもの フェリス女学院大学の挑戦1』ひつじ書房、2009年3月。
- *8 <http://www.hituzi.co.jp/books/433.html>、2012年1月27日閲覧。

